

かさまのれきし

第84回

江戸時代、笠間城下の祇園祭と網天王さん

六月の声を聞くと夏祭りが間近になります。今回は江戸時代初期に始まった笠間大町・八坂神社の夏祭りである「祇園祭」を紹介します。

祇園祭は平安時代半ば頃、京都で大流行した疫病を鎮めるための、東山の祇園社（感神院）の祇園御霊會が始まりといわれます。神輿に移した同社の祭神牛頭天王を、御所（大内裏）に隣接する神泉苑へ送って疫病を退散させるという催しで、疫病（悪霊）を水辺に流すという考えを反映しています。

笠間へ牛頭天王の信仰が伝えられた時期は明らかではありません。仏ノ山峠を越えた小貫村（栃木県茂木町）の人々が、同村に祀られる天王社の祭神牛頭天王を菰に包んで川へ流し、下流の古町村（石井）の人々が光り輝くこの菰を拾い上げ、集落内に祀ったといわれます。この地が天王塚です。天正年間（一五七三～九一）、この祭神を市毛村の三所神社へ移し仮に安置、しばらくの間そのまま置かれたといわれます。

寛永十二年（一六三五）笠間藩主浅野長直の家臣菅谷四郎兵衛・城下の住人松山忠次郎の呼びかけで神輿が造られ、同十四年六月、祇園祭が三所神社と城下の人々により始まりました。祭礼の主役は庶民の暮らす五か町（愛宕町・大町・高橋町・新町・荒町）の人々です。天明六年（一七八六）、現在地に牛頭天王社（八坂神社）が造営されるまで、同祭礼では五か町の希望者の中よりクジ引きで選ばれた当屋が祭礼の運営に重要な役割を担っていました。祭礼開始の初年から当屋役の名を記録した文書が残っています。

正保二年（二六四五）浅野氏は播州赤穂（兵庫県）へ

国替えとなり、新藩主井上正利が着任します。寛文五年（一六六五）三月、願主菅谷弥右衛門・三所神社祇園の仁平宗正（主殿頭）は、井上氏の重臣津川権太夫の力添えもあり、同家臣団一二七人から芳志を集めて基金とし、京都で神輿を新たに購入しました。城下の若者二人が四〇日を費やして神輿を担いで京都から笠間へ運び寛文五年六月二十日に到着、六月二十四日の本祭礼当日にお披露目されました。煌びやかな飾りを保護するため網を張り廻らしたこの神輿が「網天王さん」（市指定文化財「八坂神社神輿」）です。六月二十三日が宵祭、二十四日に本祭礼、二十五日が豊作を祈願する「お田植祭」です。この後、二十四日には「網天王さん」が城下の人々に担がれて大通りを渡御、揃いの衣裳をまとった「笠抜き踊り」の一隊が街中を踊り流し、町内ごとに山車や造り物を掲げて神輿の渡御に色を添えました。毎年のように水戸や江戸などから芸人が招かれて歌舞伎や浄瑠璃・大神楽などが俄か仕立ての舞台で演じられ、周辺村々からの見物人も加わり大いに賑わいました。

今風というならば、官民が一体となり五か町を挙げて始めた祇園祭です。長い年月の中には笠間藩の財政破綻や飢饉などにより、祇園祭はその都度左右され、人々も暮らしの浮き沈みを経験しました。五か町の人々は耐え忍び、その度に創意・工夫と努力を重ねて祇園祭を守り今日に至りました。祇園祭は五か町の人々の誇りであり、町の盛衰を示すものでした。

（写真提供）八坂神社 仁平 孝之
（市史研究員）矢口 圭二



網天王さん（神輿）



旧笠間町大町通りの神輿渡御風景（昭和13年頃）